

「それでも食べたくない」を視聴して

「それでも食べたくない～イギリス 拒食症治療施設の日々～」を視聴した。

拒食症の患者の9割は女性で、生死に関わる重大な心の病で、放っておくと5人に一人は死亡とか。

イギリスでは拒食症の10代の患者が増えており、しかも低年齢化（8才～10才）しており、カウンセリングと平行して、カロリーの高い食事をきちんと食べさせることに力点がおかれている、ある拒食症専門のクリニックでの少女たちの心の内の告白の4ヶ月に渡る取材・ルポ番組であった。

クリニックのスタッフによると、少女たちはみんな、完璧主義で、成績が良く、才能に恵まれているが、自分に自信がなく、自分を卑下する傾向があり、みんなに鬱症状があるという。

食べさせられた摂食カロリーを消費しようと隠れて運動をし、部屋でもずっと動き回る少女。

「食べないと死ぬと言われるけど、死んでもいい。でも、今日も生きている。限界までやりたくなくなってしまうの。」、「脱水状態になっても、食べない、飲まない自分に、自信が持てるようになる。」、「拒食することで、周りは私を見てくれる。」などの告白の数々。

拒食やカロリー消費にチャレンジすることで、自己認識・自己確認できるということか？

自己認識・自己確認や自信というものは、勇気を出して人と係わり合う過程で、認められていると感じることが多い中でこそ育まれるものだけに、自分で我が身を虐める行為でそれらを感じようとしているとしたら、それこそ、正に痛ましいこと。

スタッフによると、目標体重に達して退院した少女たちは、拒食する自分の問題点に気づきそれらに向き合い自分で克服していくタイプ、退院後も数ヶ月～1年程は専門機関のサポートが必要だが克服するタイプ、痩せたいという願望を克服できずに専門機関を渡り歩くが大人になっても拒食症を引きずるタイプと、3つのタイプに分かれるという。

家族の苦悩、クリニックとの連携支援策も取材されていたが、少女たちがなぜ拒食に陥ったのかの背景の深いところまで踏み込んだ検証にも、番組の中で触れて欲しかった。

そうした背景の検証にこそ、子どもたちの自分の体を虐めることへの予防策が見えてくると思うのだが…。